

本章「精神症状学序論」のイントロダクション「1. 症状, 徴候, 症状群」は医学用語の起源がギリシアに遡ることからはじまり, ギリシア語の用語解説がなされている。これを見るだけで, 大橋博司先生がいかに博識であったか想像がつく。

「2. 各時代の症状記載」のなかで大橋が注目するのは Galenos (A.D. 129~199) であり, この時代に4つの精神症状群をすでに記載している点である。それらが今日の症状群の考え方そのものでないことはいうまでもないことであるが, この時代にすでに「代謝性・中毒性の症状群」, 「熱性せん妄など意識障害を基盤にする症状群」, 「mania と melancholia (今日とは内容は異なるが)」, 「認知症症状群」を記載していたこと, それらが近代の医学にまで大きな影響を及ぼしたことから, 大橋は古代ギリシア医学の心眼に驚嘆したものと思われる。

中世に関して大橋は「魔女迫害, 魔女裁判」に多くの紙面を割いている。魔女迫害や魔女裁判はあまりにも有名であり, 精神科医であれば誰もが常識として知っていることではあるが, 中世における神学的, 法学的認識論からやがて医学の次元で判断される時代(啓蒙時代)へと移っていく過程, その間のさまざまな事例を目にすることはよほどの専門家でなければならないであろう。その意味では大橋の魔女迫害, 魔女裁判に関する記載は大変貴重である。

後半は18世紀中葉以降台頭してきた「疾病分類学」と「精神医学」の到来についての歴史的考察である。精神疾患の系統的分類の下敷きが Linne の植物分類学であるというのはたいへん興味深い。その Linne 自身が精神疾患を第1; 観念性, 第2; 想像性, 第3; 感情性の3つのカテゴリーに分けたという記述がある。この時代はまだ精神病院といえるものはなく, 精神病患者も他の患者や浮浪者と混在していた時代である。大橋はこの点について「nosologie は精神医学の到来を準備していたとはいえよう」と記載しており, 面白い見方であると感心した。

最後に大橋は19世紀の幻覚妄想論を展開している。われわれはもっぱら, Jaspers 以後の精神病理学に基づいて教育を受けてきた関係で19世紀の幻覚・妄想論はあまり目にする事が多くない。その意味では, これもまた新鮮な内容であると同時に20世紀以後の幻覚・妄想論と対比して読むと面白い。

(樋口輝彦)